



クビアカツヤカミキリ卵における生物蛍光の発見とブラックライトによる簡易検出法

栃木県農業試験場 ^{はる}春 ^{やま}山 ^{なお}直 ^と人

はじめに

クビアカツヤカミキリ *Aromia bungii* (Faldermann) (カミキリムシ科; ジャコウカミキリ属) (以下、クビアカとする) はモモ、スモモ、ウメ等の果樹類や、サクラ等の花木を幼虫が食害し、衰弱・枯死に至らしめる特定外来生物である。国内では2011年に初めて確認され(安達, 2017), 果樹でも国内各地において被害が拡大して問題となっている(中野・渡邊, 2017; 春山ら, 2019; 和歌山県, 2019)。クビアカは、ふ化した幼虫が内樹皮に穿孔し、樹皮下を食害するため(加賀谷, 2019), 幼虫の寄生は外部から直接確認できない。樹木への寄生の

有無は、幼虫が樹皮に開けた排糞口から排出するフラス(虫糞と木くずの混合物)によって判断されるが、本種の幼虫は若齢期にはフラスをほとんど排出せず、フラス排出量が増加して被害に気づくころには、既に樹皮下が広範囲に食害されていることが多い。このように、幼虫の防除対策が後手に回らざるを得ず、被害の未然防止が非常に困難であることが大きな課題となっている。なお、卵は平均長 1.68 mm のゴマ粒状で(浦野・加賀谷, 2017), 雌成虫は産卵加工をほとんどせずに樹皮の割れ目やすき間に産卵する(岩田, 2018)。この際、雌成虫は腹部末端を伸ばしてすき間に差し込んで産卵し(図-1), 外部からは卵が見えにくい状態となる。このため、



図-1 クビアカツヤカミキリ雌成虫の産卵行動と樹皮の凹みに産み込まれた卵

Discovering Biofluorescence from *Aromia bungii* (Coleoptera: Cerambycidae) Eggs and Development of a Simple Method for Detecting Eggs with Black Light. By Naoto HARUYAMA

(キーワード: クビアカツヤカミキリ, 卵, ブラックライト, 生物蛍光)